ミルクアイドル

イチャイチャにゅ～ライブ

STORY BY MISORA KANZAKI
ILLUST BY RU SAKURANO

神崎美宙
挿絵／櫻野露

立ち読み版

序　章　006
第一章　アイドルのミルク搾り　014
第二章　マッサージ　063
第三章　嫉妬するお嬢様　102
第四章　エッチな撮影会ごっこ　143
第五章　アイドルたちの休日　183
第六章　イチャイチャにゅ〜ライブ　219
終　章　254

登場人物紹介

Characters

加藤（かとう）くるみ

B:91（G）／W:58／H:85

大人気アイドルグループ「ホルスタインガールズ」のセンター。いつも明るく元気いっぱいで、アイドルになるのが小さなころからの夢だった。

霧崎愛香（きりさきあいか）

B:95（I）／W:59／H:83

「ホルスタインガールズ」に所属するお嬢様アイドル。他人に厳しいだけでなく自分にも厳しい性格で、向上心が強い。プライドが邪魔して素直になれない一面も……？

笠原亜美子（かさはらあみこ）

B:101（J）／W:61／H:92

「ホルスタインガールズ」の最年長にして、メンバーのまとめ役。おっとりとした母性的なキャラで、ファンの皆から愛されている。

中島徹（なかじまとおる）

「ホルスタインガールズ」のマネージャーとなり、ミルク搾りの仕事を任される。彼女たちがデビューする前からよくお世話をしていた。

中島順子（なかじまじゅんこ）

プロダクションの女社長。徹の叔母で、元アイドルという経歴がある。

第一章　アイドルのミルク搾り

「せーの……ホルスタインガールズですっ♪」

肩を寄せ合うように並ぶくるみたち三人の明るい声がスタジオに響く。

それぞれが二の腕で自慢のおっぱいを挟み、親指を下に向けて両手の指を合わせたハートマークを作った。こうすると指で作ったハートマークから彼女たちの深い峡谷のような胸の谷間が見えるので、ファンたちの間でラブ谷間ポーズと呼ばれている。

そんなお決まりのポーズで登場したホルスタインガールズに、スタジオの観客たちは歓声を上げた。

「いやー、すごい人気ですねぇ～……それにしても、今日も三人ともお胸の方が……もう大変なことになってますね」

彼女たちの代名詞でもある牛柄コスチュームから、今にも弾け出てきそうな迫力たっぷりの巨乳爆乳に圧倒されつつ司会のタレントが三人にマイクを向ける。

今日はバラエティのトーク番組の収録だ。

くるみも愛香も亜美子も新人ながら無難にデビューの秘話やそれぞれの趣味などを話し、収録は順調に進んでいく。トラブルと言えば彼女たちのマネージャーとしてテレビ局に来たのは初めてだったので、収録前にスタジオに入ろうとした徹がファンと間違えられて追

い出されそうになったことくらいだ。
社員証を見せてすぐに誤解は解けたので、スタジオの隅で彼女たちの仕事ぶりを見守っていた。ステージの上でたくさんの照明を浴びてキラキラと輝いているくるみたちは、本当に活き活きとしていて所属事務所の社員としても一ファンとしても嬉しくなってくる。
「はーい、OKです！　お疲れ様でした～」
そうこうしているうちに収録が終わり、出演者たちはスタジオから続々と引き上げていく。徹もホルスタインガールズの三人を連れて控え室へと戻った。
「はぁ～、疲れた～……あ、お菓子食べよっと」
「ちょっと、またですの？　太っても知りませんわよ」
「うぐっ……そ、それは困るかも……」
仲よくおしゃべりをしながら、アイドル娘たちは中央に置かれたテーブルの周りに並んだパイプ椅子に腰を下ろす。今日も無事にスケジュールをこなした三人のお茶を用意していた徹はホッとため息をついた。
しかし少年の顔は難しい表情を浮かべたままである。
その原因はといえば、昨日の出来事だ。
人気はうなぎ上りで順風満帆に思えた牛さん系アイドルたちの芸能活動。それなのに本人たちの口から告げられたのは、突然その自慢のおっぱいからミルクが出るようになってしまったという衝撃の内容である。

胸が張って苦しかったり、我慢していると突然ミルクが溢れてきてブラジャーが濡れてしまったりしたこともあるそうだ。

しかもくるみも愛香も亜美子も三人全員が同じ症状らしい。俄に信じがたい話だが、すでに社長に相談して医者に診断してもらっているので本当のことである。

（それにしても驚いたよなぁ……）

小さなプロダクション所属で無名の新人ながら、いきなり全国クラスの大人気グループになった牛っ娘アイドルたち。

スケジュールが突然多忙になったのはもちろん、どこに行っても常にマスコミや大勢のファンに追いかけられる存在になり、周囲を取り巻く環境が急激に変化してしまった。

そのストレスでホルモンバランスが崩れておっぱいが出るようになったのでは、というのが医者の話らしい。ただ病気というわけでもなく、胸が張ったらミルクを搾ればいいそうなので重病ではなく一安心である。

「徹くん、そんなところに突っ立ってどうしたの？」

「そうですよ、こっちに座って一緒にお話しませんか？　お菓子もありますよ～」

部屋の入り口で一人考え込んでいた少年にアイドル娘たちが声をかけてきた。

「あ、はい……いただきます……」

徹は自分の分のお茶を用意して、中央に置かれたテーブルを囲んで座るくるみたちの輪に加わる。デビュー前から一緒に努力してきたので彼女たちはとても仲がよく、仕事が終

わるとこうやって楽しくおしゃべりしたりすることも多い。
大人気アイドルたちと一緒にお茶して話をするなんて、ファンの人が見たら羨ましがるだろうななどと考えていたら、隣で愛香がワザとらしくため息をついた。
「はぁ、またボンヤリとして……アナタはわたくしたちのマネージャーになったのですから、もっとしっかりして欲しいですわ」
「もう、愛香ちゃんったら〜、またそうやって徹くんに意地悪を言うー」
「……なっ！　わたくしはいつも当たり前のことを言っているだけで、意地悪なんて言っていませんわっ！」
からかうように笑っているくるみをキッと睨みつける愛香。
お嬢様が言うように新入社員でありながら徹がホルスタインガールズのマネージャーに抜擢されたわけだが、実はこれには理由があった。
「あの、やっぱり昨日のことを気にしているんですか……？」
考え事をしていたのが顔に出てしまっていたのか、亜美子が心配そうな表情を浮かべておずおずと尋ねてくる。
「ええ、まあそうなんですけど……胸の具合はどう、ですか……？」
徹が質問を返すと、亜美子だけでなくキャッキャと騒いでいたくるみと愛香まで頬を赤らめて顔を見合わせた。そしてお互いの様子を窺いつつ、少年に視線を向ける。
「あたしは……大丈夫かな……」

「そうですわね、わたくしもまだ平気ですわ……」
「私も、です……」
遠慮がちに答える彼女たちを見て内心ホッとした。
「じゃあ、今日はまだミルク搾りしなくてもいいですね……？」
徹がそう尋ねると、三人は無言で頷く。
きちんとミルクを搾っていないと胸が張りすぎて具合が悪くなったり、仕事中に突然射乳してしまったりと色々困ったことになる。しかし三人とも自分では上手くおっぱいを搾れないらしく、医者に相談したところ恋人など心を許せる他人に搾ってもらえばいいとアドバイスをもらったそうだ。
ただ彼女たちは当然のように恋人はおらず、社長の順子も多忙で手が回らない。しかも内容が内容なだけにそう誰彼と任せられることではない。それに部外者――特にマスコミなどにバレたらとんでもないスキャンダルになってしまう。
そこで彼女たちの間から最も信頼できる存在として名前が挙がったのが徹だった。当時はアルバイトながらデビュー前からずっと支えてきてくれたし、異性ではあるが誰かを選ぶなら少年がいいと彼女たちははっきり言ったらしい。
それに親戚なので情報をリークするような心配もなさそうだと順子も納得し、マネージャーとして三人をサポートしながら必要があればミルクを搾るようにと命令したのだ。
（でもだからって僕がみんなのおっぱいを……し、搾るなんて……）

収録のすぐ後なので例のホルスタイン柄の衣装を着た彼女たちの胸を改めて見つめ、徹は思わず生唾をゴクンと飲み込む。

「も、もう……どうしたの？　そんなにあたしたちの顔を見つめちゃって……」

三人の中で一番小さなサイズのおっぱいでもくるみの91センチのGカップ。トレードマークの牛柄ビキニに包まれた乳房は彼女が少し動くだけでぷるぷると弾み、布地が食い込む乳肉を見ているだけでもとても柔らかそうなのが伝わってくる。

二の腕まであるグローブや太股まで覆うピンクのタイツがぴたりと張りつき、女の子らしく丸みを帯びた身体を可愛らしく演出していた。

しかもそんな迫力たっぷりの巨乳を持ちながら、正統派アイドルらしい大きな瞳に甘えん坊っぽくて可愛らしい顔立ち、そして艶やかなピンクのロングヘアと美少女オーラが全身から漂う。それに露出の激しい衣装から覗く瑞々しい肌は健康的な色をしており、照明の光を浴びて眩しいくらいに輝いている。

元から明るくて元気いっぱいのくるみは大人気アイドルになっても気取った様子もなく、誰にでもフレンドリーに接するのでとても親しみやすい。

「ちょっと、徹？　視線がイヤらしいですわよっ……」

くるみとは対照的に愛香は頬杖をつき、気の強そうなツリ目でこちらを睨んでくる。

金髪の縦巻きロールや高圧的な言動、少し浮世離れした優雅な仕草など、いかにもお嬢様らしい雰囲気を漂わせていた。それに何と言っても存在感があるのは、そのIカップの

ゴージャスなおっぱいだ。

裾が胸下までしかない牛柄のシャツの胸元は大きく開き、窮屈そうに押し込められたロケット型おっぱいは重力に逆らうように前方に張り出している。胸元で結んだ結び目が今にも解けてしまいそうなほどパツンパツンになっている。

95センチという数字から想像できるように胸の谷間は深く、左右から寄せ上げられた乳肉は見るからに弾力があって柔らかそうなおっぱいだった。

それにモデルのように手足は細くて長くスタイルは抜群で、特に腰の位置が高く日本人離れした美脚のラインを浮かび上がらせるニーハイが目を惹く。

お嬢様キャラや他人に厳しい言動などから高飛車なイメージを持たれやすいが、本当はそれ以上に自分にも厳しいストイックな性格で心優しい少女だということを付き合いの長い徹は知っている。

「もう、愛香さん……そんなことを言ってはダメですよ。徹さんは私たちのことを心配してくださっているのですから……」

いつもと変わらずハチミツのように甘い笑みを浮かべた亜美子はおっとりした口調でお嬢様を嗜めた。ショートカットの茶髪でサイドだけ伸ばした髪型に、優しそうなタレ目や肉感的で色っぽい唇と、他の二人に比べて少々大人びている。

物腰が柔らかく上品で誰にでも分け隔てなく接する彼女には、普段は高飛車な愛香も一目置いているくらいだ。一番年上ということもあり、みんなのお姉さん的な存在で自然と

グループのまとめ役になることも多い。
そんな彼女が一番なのは年齢だけではない。巨乳爆乳揃いのホルスタインガールズの中でもとりわけ圧倒的な存在感を誇るトップ101センチのJカップバスト。お馴染みの牛柄をした大きな二等辺三角形の布地で胸を覆ったホルターネックビキニを着ているため、そのメートルオーバーのサイズを誇る爆乳の重量感が非常に強調されている。
大人顔負けの爆乳ながらビキニにはフリルやリボンなどをあしらった可愛らしいデザインなので、とてもキュートでふんわりとした亜美子によく似合っていた。そんな彼女のカワイイとセクシーを併せ持つ独特の魅力が世の男たちを虜にしてしまうのだ。
「い、いえ……すみません……具合が悪くないならいいんですけど……」
「うん、今のところは大丈夫、かな……」
徹は彼女たちのバストを凝視していたことに気づき、慌てて視線を逸らした。メンバーの三人も頬を赤らめたまま決まりが悪そうに俯く。
しかし悪いとは思いつつ、牛柄コスでさらに大胆にアピールされている存在感たっぷりのバストにまた視線は吸い寄せられてしまう。
自社の所属アイドルたちに劣情を覚えるなんてご法度に決まっている。ただ、徹も社員である前に彼女たちのファンであり一人の男なのだ。あの今日本中で一番注目されているであろうおっぱいからミルクが出る上に、それを自分が搾ることになるかもしれないと思うと意識せずにはいられなかった。

「……あら、家からもう迎えが来るそうですわ……」
ミルクのことが話題に出たせいでみんな黙り込んでしまい、少し微妙な雰囲気が漂っていたところ、スマホを取り出しメールをチェックしていた愛香が不意に口を開く。
「あっ、えっと……じゃあ着替えないとですね……僕は外で待ってますから、終わったら声をかけてください……」
徹は気恥ずかしさから逃げるように控え室を後にした。

テレビ局の廊下で待機すること十数分。着替えて帰り支度を済ませたホルスタインガールズの三人が出てきた。
大企業の社長の娘で家が大金持ちの愛香は毎回迎えの車が来るため、駐車場で明日のスケジュールを確認してから別れる。時刻は深夜を大きく回り終電もなくなっているため、くるみと亜美子は徹が車を運転して送っていく。
数ヶ月前に免許を取ったばかりの新米ドライバーは、夜なので特に注意しながら車を走らせた。距離的に近いくるみの家から回って明日のスケジュールを確認して玄関先まで見送り、今度は亜美子のマンションへと向かう。
「じゃあ、明日は昼の一時から雑誌の取材が入ってますので、十一時半には迎えに来ますからよろしくお願いします……」
「はい、いつもありがとうございます……」

亜美子は口元を隠したままコクンと頷いた。朝からずっと胸が張って苦しいと言っていたし、日本人離れしたサイズを誇るこの乳房にはかなりミルクが溜まっているのだろう。

蕩けるように柔らかい乳房をグイグイと揉み続けていると、元からずっしりと重かった乳肉が彼女の言うように張りを増してきているように感じる。

「じゃあ、そろそろミルクが出そうですか……？」

「も、もう……んっ……すぐ、だと思います……」

愛撫を開始してまだそんなに時間は経っていないのに乳肌は上気し、ピンク色の乳輪は膨らみ、先端も硬く尖っていた。ますます顔を真っ赤にしたアイドル娘は快感に耐えるように腰をくねらせている。

「あっ……んんっ、先っぽは……はぅンンっ……」

自己主張をする乳首を指先で突っつけばコリコリとした感触が新鮮で、亜美子の口からは先ほどまでより一オクターブ高い喘ぎ声が響く。

（やっぱり乳首が感じるんだ……）

彼女のスイートスポットを探り当てた喜びに胸を躍らせながら、親指と人差し指で勃起した乳首を優しく摘（つま）み、残りの指と手のひらで乳肉を揉み搾った。

当然のように両手から爆乳は溢れて愛撫は先端の方に集中してしまう。それでも敏感な部分を責められるだけで十分に感じているらしく、亜美子は普段聞いたこともないような甘ったるい声で喘（あえ）ぐ。

「そ、そこ……気持ちいい、です……あぁ、ンっ……おっぱいが火照ってきて……ミ、ミルクが……もう出そうですっ……」

彼女の切羽詰まったような声に煽られ、乳揉みをする指先に力を込める度に大迫力のJカップ爆乳が淫らにたわむ。先端はますます硬く尖り、いつの間にか亜美子は目を閉じて乳悦に耐えていた。

「あぁっ、ダ、ダメですっ……んっ！」

不意に声が途切れたかと思うと、亜美子はまるで胸を突き出すように背中を反らせた。

ぴゅっ、ぴゅるるっ……ぷしゃっ！　ぴゅ、ぴゅぅぅぅッ!!

次の瞬間にビクビクとしなやかな肢体が痙攣を起こしたように震え、おっぱいの先端から白い飛沫が飛び散る。

「うわっ！　す、すごいっ……本当にミルクが……」

彼女たちの話を疑っていたわけではないが、本当に妊娠もしていないのにおっぱいからミルクが出るところを目にすると驚いてしまう。少年は目を白黒させながらも、ムニムニと握力を込めたり緩めたりして乳房を揉んだ。

まさにミルクタンクと呼ぶに相応しいJカップ乳はその度に勢いよく射乳を繰り返し、徹の手を濡らして手首の方へと滴り落ちていく。徹は手やスーツにミルクが飛び散るのも気にせず、魅入られたかのように夢中になってその極上の感触を味わい続ける。

「ウ、ウソ……私ったら、こんなに……はぅん、は、恥ずかしいっ……」

彼女は快感に耐えるように身体を丸めて顔を伏せる。ブラウンの髪が揺れ、細い肩がビク、ビク、ビクッと小刻みに震えていた。

今まであまり上手く搾れなくて順子に相談していたくらいだ。それなのに徹に揉まれると止め処なくミルクを溢れさせるおっぱいに亜美子自身が一番驚いているらしい。

「あ、あぁ……徹さん、服が……濡れちゃいます……うぅ、やっぱりミルクが出るなんて気持ち悪くないですか……？」

それでも心優しい彼女はまず少年を気遣うことを忘れない。腕を伸ばしてテーブルの上に置いてあったティッシュを数枚取ってミルクで濡れた所をふいてくれた。

「いや、全然気持ち悪くなんてないですよ。それよりどうですか、胸の方は楽になってきてますか？」

「ありがとうございます……はい、とっても……張り詰めていたものがスーッと抜けていく感じで楽になってきました……それにすごく気持ちいいです……」

亜美子は照れたように視線を伏せつつ、胸愛撫で感じていたことを素直に口にする。

そうやって話している間も壊れた蛇口のように彼女のおっぱいからはぴゅるぴゅるとミルクが溢れ、下乳に垂れ落ちブラジャーのカップを濡らす。

「でもまだまだ出てきますよ……全部搾った方がいいですよね？」

上手くできるか不安だったが、しっかりとミルクを搾れているので安心した。

これで彼女の体調がよくなるならと徹はスーツの上着を脱いでシャツを腕まくりし、再

びおっぱいの愛撫を始めようとした。
「ま、待ってください……あの、徹さんがイヤでなければなんですけど……」
ニットを捲り上げて乳房を丸出しポーズのまま亜美子はおずおずと切り出してくる。しかしすぐに口ごもり、恥ずかしいのか頬を赤らめて視線を逸らすように俯く。
それでも少年が言葉の続きを待っていることに気づくと、ゆっくりと口を開いた。
「本当にイヤじゃなかったら、ですけど……このまま搾ったら徹さんのスーツやソファを濡らしてしまうので……その……できたら、吸って、いただけませんか？」
「……へ？　吸うって、ミルクをですか？」
今アイドル界で一番注目されていると言っていいホルスタインガールズの亜美子のおっぱいを生で触っていることで頭はいっぱいで、舐めたりしゃぶったりする行為まで発想は及んでいなかった。
おかげで彼女の予想外すぎるお願いに驚きのあまり、間抜けな声を上げてしまう。
「あっ、い、いえ……ゴメンなさい、忘れてください……マッサージをしてもらえるだけでも十分なのに、ワガママを言ってしまって……」
そんな少年の反応を見て亜美子は拒否されたと思ったのか、慌てた様子で首を横に振り自分の言葉を打ち消した。
（亜美子さんの……おっぱいを吸う……僕が？）
世の男たちが憧れる大人気アイドルの乳房を好きに揉んでミルクを搾るだけでなく、あ

のぷっくりと膨らんだ乳首をしゃぶってミルクを吸って欲しいとお願いされているのだ。何で今まで思いつかなかったのかと思うほど、考えれば考えるほどそれは甘美な行為に思えた。

「イヤなはずないじゃないですか……もちろんいいですよっ……」

徹は大迫力の爆乳を寄せ上げ、吸い寄せられるようにその先端にしゃぶりついた。

「はぁんっ！　え、えぇっ……本当に、いいんですか……ひゃぅ、んふぅぅっ……」

ツンと尖った乳首を乳輪ごと口に含むと、亜美子は顎を反り返らせて喘ぐ。明らかに今までよりも声は甘ったるく、呼吸は激しく乱れていた。

そんな敏感な反応に胸をトキめかせつつ、夢中になって少女のミルクを吸いまくる。

「もちろんですよ……亜美子さんのためなら、お安い御用です……ちゅ、ちゅぅ……」

「あぁ、嬉しいですっ……はぁ、はぁんっ……徹さんに胸を吸われると……感じすぎてミルクが止まらなくなっちゃいますっ……」

彼女が言うようにミルクタンクと化したJカップの爆乳からは、搾っても搾っても大量のミルクが溢れてきた。少年はぷるぷると震えるプリンのように柔らかい双乳を交互に吸い、乳汁を全て嚥下していく。

「い、いい……気持ちいい……んっ、ミルクを搾られるのが……こんなに、気持ちよかったなんて……あ、あぁぁ……」

敏感な乳首をしゃぶられ、溜まりに溜まっていたミルクを吐き出し、胸の張りがスッと

抜けていくような搾乳の快感に身悶えするアイドル少女。悩ましげに腰をうねらせ、肉感的な唇からは絶えず熱を帯びた色っぽい吐息が漏れてくる。
「んちゅ、ンぐ、ゴクゴクッ……亜美子さんのミルク美味しいです……」
蕩けるようなおっぱいの揉み心地を楽しみながら、生搾りミルクを味わう。誰も知らない亜美子の姿を自分だけが知っていると思うと、興奮で頭が変になりそうだった。
「ンっ、はぁんっ……は、激しいですっ……ンふぅぅっ！」
あまりに感じすぎて全身に力が入らなくなってきたのか、少年が乳房にしゃぶりつく勢いに圧されて少女の身体はフラフラと揺らめき、後ろに倒れそうになっている。
それでも徹はお構いなしに両手でおっぱいを揉みしだき、ミルクを吸いまくった。
「あ、あぁっ、あっ……はぁ、イクっ……イッちゃいそうですぅっ……」
そんな乳愛撫の快感に耐えきれなくなったのか、亜美子の豊満な肢体は徐々にソファへと沈み、乳房を鷲掴みにしたまま身を乗り出した少年が押し倒したような格好になる。
この体勢は色々とまずいのではとか考える余裕もなく、徹の頭の中はもうすでに彼女のミルクを味わい尽くすことでいっぱいだった。仰向けになり少し横に広がった爆乳を左右から両手で挟み、ピンク色の尖りを中央に寄せ上げて交互にしゃぶり続ける。
「もっと、気持ちよくなってください……溜まってるの全部出しましょう……」
「は、はぃ……もうイキますっ……また大きいのが、きそうなんですっ……」
いつしか亜美子の腕は少年の首に回り、自分の胸に押しつけるようにギュッと抱き寄せ

ていた。甘い声で喘ぎながら愛撫をおねだりしてくる美少女の姿があまりにも可愛くて、徹の興奮もとっくに最高潮に達している。

汗ばむ乳肌に十本の指を食い込ませ、コリコリとしてしゃぶりがいのある乳首を舌で転がし、次々に噴き出す乳ミルクを吸う。

「あぁっ！　ダメ、おっぱいが……おっぱいがイクぅぅぅ〜〜〜〜ッ!!」

少年の頭を抱きしめる腕に力が入り、おっとりとした彼女からは想像もできないほど甲高い悲鳴が上がった。その瞬間――。

ぴゅうっ！　ぴゅるっ、ぴゅっ！　ぷしゃ、ぷぴゅぅぴゅるるぅぅぅッ！

思いっきり鷲掴みにした乳房から今まで一番派手にミルク飛沫が上がる。しゃぶりつく少年の口の中に、反対のおっぱいは宙へと大量に乳汁を吐き出し、亜美子は身体の奥から湧き上がる何かに支配されてしまったかのように全身をビクビクと震わせていた。

（えっ、まさか……イったの……？）

無我夢中でアイドル少女のおっぱいを吸っていた少年は、その激しい反応に驚きつつもどんどん溢れてくるミルクを飲み干していく。

両手で爆乳を搾り続けて交互にしゃぶり、溜まりに溜まっていたミルクを乳腺に残った分までしっかりと吸い尽くした。おかげでやっとおっぱいが止まる。

その頃には少年の口の周りや顔はもちろん、シャツまで彼女が盛大に噴き出したミルクでびしょ濡れになっていた。

「いや、そんな……無理しなくても……はうっ！」
愛香はキュッと唇を結ぶと、少年の制止も聞かずゆっくりと腰を上下に揺らし始めた。
ズブッ、ズリュッ……ズブブッ、ズニュゥゥゥ！
挿入しただけでもキツく絡みついていた膣肉とペニスが激しく擦れる。
自分の手で扱くのとはまったく違う熱く潤んだ柔肉の感触が肉棒と密着し、摩擦する度に激しい快感を感じ腰がビクビクと震えた。
「ほ、ほらぁ……わたくしが……一番でしょう……んっ、ンはぁぁっ……」
強がり続けるお嬢様は両膝を立てて、積極的にヒップを揺らめかせる。ただその動きはぎこちなくストロークの深さやリズムもバラバラで、男を楽しませるというよりも必死さばかりが伝わってくるような腰使いだった。
「はっ、うっ……愛香さん、激しすぎますよっ……そんなにされたら、あぁぁっ！」
しかし童貞ではなくなったものの、性的な刺激に慣れていない少年のペニスにはその勢い任せで激しい責めが堪らなく気持ちよくてあっという間に射精欲をかき立てられる。
おかげで本能はさらなる肉悦を求め、勝手に下半身が動き始めてしまう。お互いに性器を擦り合わせていると、ますます粘膜は熱を帯び、濡れた音が室内に響く。
グッチュ！　ズッチャ！　グッチュッ！　ズッチャッ！
「あぁっ！　は、激しいっ……奥に、奥に当たってますのっ……」
この体位だとよりペニスが深く突き刺さるため、結合を繰り返す度に愛香の瑞々しい唇

からあられもない嬌声が漏れる。しかもその声はどんどん艶を増していく。
「はぁはぁっ……すみません、気持ちよすぎて……くぅっ！」
愛香の膣壁は柔らかく、肉ヒダが隙間なくペニスを包み込む。しかも天井の部分がザラザラとしているせいで彼女が腰を振ると、その部分がダイレクトに敏感な亀頭やカリ裏と擦れ痺れるような快感が股間に走る。
「そ、そうでしょう？　もっと、気持ちよくなっていいんですのよ……あ、んっ……ぜ、絶対に……わたくしから、離れられなくしてあげますわっ……」
少年が感じているのを知り、お嬢様は気をよくしたのか息を弾ませながらさらに腰をうねらせた。華奢な身体が大きく揺れ、何度も何度も肌がぶつかり合う乾いた小気味のいい音が五感をくすぐる。
このままではすぐに射精してしまう。何とか気を紛らわせようと乳房を揉む両手に力を込めると、ダラダラと溢れていたミルクが虹を描くように勢いよく噴き出す。
「ひぃうんっ！　おっぱいが、熱くて……ミルク搾られると気持ちいいんですの！」
むしろ自分とセックスしながら射乳をして身悶えしているお嬢様を見ていると、熱い欲望は急速に大きくなっていく。
「あ、愛香さんっ……もう、我慢できませんっ……また出そうです！」
牛柄衣装でエロさを増した爆乳を寄せ上げるように揉み、硬く尖った乳首を交互に舐めしゃぶる。ミルクの甘い味が口内に広がり、極上の揉み心地と愛撫で感じているお嬢様の

姿が欲情をかき立て、自然と腰使いも激しさを増す。
「はぁっ！　あ、あぁっ……いいですわよ、徹の好きな時に……あひぃ、んっ……お、奥に当たって……ズンズンって響いてきますわっ！」
荒々しい突き上げを受けた愛香は、少年の首に腕を回して何とか体勢を保ちながら甲高い嬌声を上げ続けていた。華奢な身体が大きくバウンドし、その度に日本人離れしたサイズを誇るIカップの爆乳が愛撫する少年の手を払いのけんばかりの勢いで暴れまくりミルクを噴き出しまくる。
この極上の乳房を味わいながら大人気アイドルの処女肉で果てるなんて、何と魅力的な行為なのだろうか。思わず射精してしまいそうになるが、最後に残るわずかな理性が待ったをかける。
「で、でも……このままじゃ、中に……」
跨られているので少年の方からペニスを抜くことができない。それなのに愛香は腰を上げるどころか、ますます激しく小ぶりなヒップを股間に打ちつけてくる。
「あ、はぁんっ……ですから、このままで……いいって言ってるでしょ！　さ、最後まで徹を感じていたいんですのっ……ですから中に出して欲しいんですの……ッ！」
お嬢様は絶対に離さないとばかりに首を横に振り訴えてきた。
普段の高飛車な雰囲気とのギャップに男心をますますくすぐられ、中出しへの躊躇も吹き飛び、興奮で気持ちよく射精することしか考えられなくなる。

「くぅっ……分かりました……じゃあ、出しますからね！　愛香さんの中にっ……射精しますよっ！」

「あん、あぁンっ！　いいですわよっ……思いっきりわたくしの中に出しなさいっ!!」

鼻にかかったような甘い喘ぎ声に呼応するように柔らかい膣内粘膜は震え、絶頂寸前の勃起ペニスを締めつけた。しかもその状態で激しく上下にヒップを揺らすせいでキツい淫肉が射精を催促するかのように竿を扱き、絶えず肉悦を股間に流し込んでくる。

先ほど射精したばかりだというのに、あのお嬢様アイドル愛香とセックスをしているという興奮が再び股間の脈動を呼び起こした。

「あぁ、もうダメ！　イク、イきますっ！」

湧き上がる射精衝動を抑えきれなくなり、反射的に背中が仰け反り、腰が浮き上がる。そして力任せに彼女の膣奥を突き上げた瞬間、股間の奥で渦巻いていた熱い欲望が一気に弾けた。

ビュビュッ！　ビュブブッ……ドビュビュッ！　ビュルビュブブゥゥゥッ!!

膣の最も深い部分である子宮口に精液を打ちつけられ、愛香は腕を首に回して大きく仰け反る。星をちりばめたように輝く金髪の巻き毛が大きく揺れ、全身をガクガクと震わせながら少年と同じく絶頂に達していた。

「はぁぁぁっ！　な、膣内（なか）に出てますわっ！　熱いのが、たくさんっ……たくさん出て、わたくしも変になって……む、胸が……ひぃう、はぅぅぅンっ!!」

目の前でぷるんぷるんと弾んでいた爆乳から、さらに大量のミルクが噴き出してくる。
ぴゅる……ぴゅっ、ぴゅぅ！　ぴゅ、ぴゅるるっ……ぴゅぅぅぅッ!!
「そ、そんな……わたくしったら……ミルクが止まらなくなってしまいましたわ……こんなこと今までなかったのに……いやぁ、どうしてぇっ……」
甘い香りを漂わせるおっぱい汁は断続的に白い虹を描き、中出しアクメの壮絶さを訴えるように少年の身体にまで飛び散る。
もうネクタイやシャツはミルクでびしょ濡れ状態になっているが、不思議と不快感はなく、むしろお嬢様が自分とのセックスで感じて射乳しまくっていることが嬉しかった。
「くっ、大丈夫ですよ……溜まってる分を全部吐き出しちゃってくださいっ……」
徹はすぐに愛香の爆乳を両手で鷲掴みにして、硬く尖った乳首を交互に吸い上げる。口の中に生温かくて濃厚な味が広がり、大人気アイドルのミルクを味わいながら中出しをしている状況にますます興奮し、胸が躍った。
「あぁんっ！　それダメ、ですわっ……今、胸を舐められたら感じすぎて……胸もアソコもいっぺんにされたらっ……ひゃう、ンはぁぁっ……」
絶頂の激しさを物語るようにあられもない声で喘ぎまくるお嬢様。膣内も今までになく激しくうねり、小刻みに収縮を繰り返して射精中のペニスに精を催促するようにキツく絡みつく。
（あぁ、気持ちよすぎて堪らないっ！）

（あ、亜美子さんのおっぱいが、腕にっ……）
下半身に集中していた意識が一気に二の腕に集まる。人肌の温かさとマシュマロのような柔らかさは極上の感触で、牡欲を煽るのと同時にどこか安心感もあり心地いい。
「……ちゅ、んはぁ……徹さんに、触ってもらいたいんです……」
亜美子はそんな自慢のJカップおっぱいに少年の手を導く。
「んちゅっ……はぁ、あ、亜美子さん……」
手のひらに幸せな揉み心地が伝わった瞬間に思わず握力を込めてしまう。
キスを繰り返しつつ、いつもミルク搾りをする時の要領で吸いつくような乳肌に指を食い込ませ、ぷるぷると弾む爆乳の甘い肉の反発を堪能する。
「もう、徹っ！　何をしているんですのッ⁉」
「そうだよ、亜美子ちゃんにばっかり構ってズルい～」
ずっしりと揉み応えのある爆乳の存在感と甘い接吻に圧倒され、下半身の動きが完全に止まってしまったせいで、下になっている二人が不満げに声を上げた。
「わ、分かってます……すぐに、あぐっ……」
上半身は亜美子に抱きつかれ片腕は彼女のおっぱいを鷲掴み状態。反対の手で愛香のヒップを掴み、腰だけを動かして何とか二人の膣奥へと肉ピストンを再開する。
しかし三人を同時に相手にしているせいで、一人だけ快感はどんどん高まっていく。
「うぅっ！　す、すみませんっ……もうイキそうです……」

ただセックスをしているだけでなく、全国で大人気のホルスタインガールズのみんなを独り占めしているという優越感。

それに彼女たちが一心に自分を求めてくれるのが嬉しくて堪らなかった。おかげで自分でも情けないくらい早く限界が近づいてくる。

「あぁんっ……やだやだっ！　抜いちゃやだぁっ……ん、あぁンっ！」

「出すなら、わたくしの中で……わたくしと一緒に果てて欲しいんですのっ！」

絶頂が迫ってくるのを感じながら本能のままに腰を振り、射精を急かしてくる二人の膣を交互に貫く。

激しい射精欲を無理やり抑え込んでいるせいで、全身が熱くて汗が噴き出てきた。

「徹さん、イキそうなんですか……？　ンちゅ、チュパ……私のおっぱいとキスで……気持ちよくなってください……ちゅ、ちゅぅぅっ……」

くるみと愛香の膣内の感触だけで絶頂に達して欲しくないとばかりに、亜美子はキスを繰り返し爆乳を揉んでいる少年の腕に自分の手を愛しげに重ねる。

しなだれかかってくる彼女の肌の温もりと、確かな愛情が男心をさらに昂らせた。

「……んぐっ、ぷはっ！　も、もうイキそうです！」

首に腕を回して抱きついてくる亜美子の甘い舌をしゃぶり、濃厚なキスとおっぱいの揉み心地に夢中になっていた徹は顔を上げて限界を訴える。

「いいですわよっ！　わ、わたくしの中に……きてぇえぇっ！」

「ひぃうっ！　あ、あはぁっ……んんっ、あたしもイッちゃうぅぅ〜〜〜っ!!」
もう快楽を貪ること以外は何も考えられなくて、とにかく欲望のままにくるみと愛香の膣奥を交互に突きまくった。愛液で濡れた肉壁が限界寸前のペニスに絡みつき、膣圧の異なる甘美な感触がますます下半身を痺れさせる。
ドロドロになった膣内を肉棒が貫き子宮口をノックする度に、愛香のヒップとフリル付きの牛柄スカートが揺らめき尻尾が弾みまくった。そして重ね餅のように押しつぶされた巨乳からは大量のミルクを溢れさせ、甲高い悲鳴が室内に響かせる。
「ぐぅぅっ！　い、いくっ、本当にっ……ヤバぃ、あぁぁぁっ!!」
制御を失い腰使いは暴走するばかりで、込み上げる射精欲もあっという間に限界に達してしまう。
「あぁんっ、徹さんっ……私のおっぱいを……もっと、いっぱい吸ってくださいっ！」
二人の膣肉にペニスをねじ込むことばかりに気を取られていたら、亜美子にグイッと胸元に抱き寄せられる。反射的に赤子のように口元に押しつけられた乳首を、ぷっくりと膨らんだ乳輪ごと吸いしゃぶりミルクをすすった。
（あぁ、幸せすぎるっ……こんなの我慢できないっ！）
亜美子の爆乳を揉みしだきミルクを吸いまくり、お互いに押しつけ合う乳肌の隙間からミルクを溢れさせているくるみと愛香のホルスタインボディをひたすら味わい尽くしているうちに、股間の奥で熱い昂りが爆発する。

「あはぁぁんっ！　あんっ！　あぁっ……あ、あたしも気持ちよすぎてダメぇぇっ!!」
「と、徹ぅっ！　一緒に、わたくしと一緒にぃ……あ、ひぅ、ンはぁぁぁっ！」
くるみのギチギチと締めつけてくる膣内も、柔らかい肉ヒダがキュンキュン絡みついてくる愛香の膣内も小刻みに震え、絶頂寸前のペニスをさらに追い詰めた。
限界を感じて腰を引き抜こうとするも、外に出したら衣装を汚してしまう。
そんな考えが脳裏を過るが、中出しはもっとマズい。
「あぁっ、で、出るっ！　イキますッ!!」
しかし迫りあがってくる射精衝動が思考する時間を与えてくれなかった。
結局、意識が白く霞んだ瞬間に逸物を膣肉から引き抜き亀頭を二人の股間に向ける。
ドビュッ、ビュルルッ！　ドビュッ！　ドビュッ、ドビュビュルぅぅぅ〜〜〜ッ!!
「きゃふぅぅぅっ！　あ、熱いぃぃんっ……わたくしのヒップにかかってますわっ！」
「あぁんっ！　頭が真っ白になっちゃうっ！　こんなのはじめてぇぇッ!!」
先ほどあれだけ射精したにもかかわらず、尿道を押し広げて放たれる大量の精液はビチャビチャと二人の股間だけでなく、お嬢様のヒップや背中にまで飛び散った。
ホルスタイン柄の衣装を白く汚されながらくるみも愛香も、だだ漏れ状態だったおっぱいからさらに大量のミルクを噴き出し身体を痙攣させる。
「ひぃうんっ！　あぁっ……ミルクが、止まらなくなってしまいましたわぁっ……」
「やぁんっ……愛香ちゃんのおっぱいが、かかっちゃうぅぅ……あたしもおっぱいが熱く

て……イク、イクぅぅんっ……」

同時に絶頂に達したらしい美少女たちの重なり合った巨乳は射乳を繰り返し、お互いの衣装やおっぱいをミルクまみれにしていく。

そして肉勃起が脈動する度に、意識が飛びそうになるほどの快感が全身を駆け回る。

反動で襲ってくる射精後の気だるさも自慰の時とは比べ物にならなかった。

「はぁ、あぁっ……気持ちよすぎる……こんなのすごすぎますよ……」

「……あ、ふぅンっ！　ふふ、徹さんったら……赤ちゃんみたいで可愛いです……」

二度目だというのに大量の精を吐き出し、亜美子のおっぱいにしゃぶりついたまま肩で息をしていると優しく頭を撫でられる。

それだけで胸に温かい感情がトクトクと溢れてきて、幸せでいっぱいだった。

「えへ……いっぱい出たねぇ……」

「はぁはぁ……それはそうですわ……だって徹はわたくしにメロメロですもの……」

荒い呼吸を繰り返していたくるみたちも熱っぽい視線を向けてくる。その嬉しそうな恥ずかしそうな表情がまた男心をくすぐり、胸がキュンキュンと高鳴ってしまう。

「あぁ、お二人とも羨ましいです……徹さん、今度は私を可愛がってください……」

大人びた笑みを浮かべ、亜美子はイッたばかりで萎えかけていた逸物に手を伸ばす。

スベスベとした指先が肉竿に絡みつき、甘い痺れが股間に走り、腰が震えた。

「はうっ！　あ、亜美子さん……今イッたばっかりですから……」

「だって私だけエッチしてもらってないです……切なくて、我慢できないんです……」
おっとり少女はしなだれかかるように抱きついてきて、脱力感のせいで全身に力の入らなくなっている徹はそのまま床に押し倒されてしまう。
「あーっ！　亜美子ちゃん、ズルい！」
「そうですわ、勝手にわたくしの徹を独り占めなんて許しませんわよ！」
しかも絶頂の余韻から回復したのか、くるみと愛香まで身体を起こし四つん這いになって近づいてきた。
ホルスタインガールズの三人は、それこそ牛のように自慢のおっぱいからミルクを滴らせエッチをおねだりしてくる。その官能的な光景に浅ましいペニスはすぐさま反応し、三度硬度を取り戻していた。
「わ、分かりましたからっ……順番にしますので、今度は亜美子さんと……」
「あぁ、嬉しいですっ！　うふふ、大好きです……徹さん……チュッ♪」
宝石のような大きな目を細め唇を寄せてくる亜美子。
それをくるみと愛香が黙って見ているはずもなく、三人分のキスの嵐が顔面中を襲う。
「もう、亜美子ちゃん！　次はあたしだからねっ……」
「何を言っているんですの？　わたくしに決まっていますわ！」
結局、徹たちは写真のことなど忘れ、可愛いアイドル少女たちとのミルクエッチに夢中になっていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!